

## 西暦八世紀中葉バスラにおける海寇とインド西岸部情勢

亀谷 学

## はじめに

ヒジュラ暦 230 年代（西暦では 850 年前後）、アッバース朝第十代カリフ・ムタワッキルの時代に著されたハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』には、ヒジュラ暦 149 年の条、151 年の条、153 年の条に以下のような記述が見られる。

この年（149/766-767 年）、ミード al-Mīdh がシャット・アルアラブ（ティグリス川とユーフラテス川の合流地点より下流の部分）河畔 Dijlat al-Baṣra にあるムハッラバーン<sup>1)</sup>に侵入した。[Ta'riḫ Khalifa 425]

この年（151/768-769 年）、ミードがシャット・アルアラブ河畔に侵入した。アブー・ウバイダ・サアディー<sup>2)</sup>が彼らと会戦した。[Ta'riḫ Khalifa 425]

この年（153/770 年）ミードがシャット・アルアラブ河畔にあるアミール運河<sup>3)</sup>に侵入し、人々を殺し、また捕虜とした。ナドラ<sup>4)</sup>が私に伝えたところによると、彼はア

- 1) Muhallabān. バスラ近郊の村。ウマイヤ朝期のバスラ総督ムハッラブ・ブン・アビー・スフラ al-Muhallab b. Abī Ṣufra にちなんだ名付けられたと言われる [Mu'jam al-Buldān 1: 435, s. v. "al-Baṣra"]。パラズリーによるとアッバース朝期にはスフヤーン・ブン・ムアーウィヤ・ブン・ヤズィード・ブン・ムハッラブの一族の私有地になっていたという [Futūḥ al-Buldān 367]
- 2) Abū 'Ubayda al-Sa'dī. 詳細は不明だが、ファドル・ブン・ファドル・サカティール al-Faḍl b. al-Faḍl al-Saqāṭī のことか。イブン・アビー・ハーティムはハディース学者伝記集の中でファドル・ブン・ファドル・サカティール・アブー・ウバイダ・サアディー・バスリー al-Faḍl b. al-Faḍl al-Saqāṭī Abū 'Ubayda al-Sa'dī Baṣrī として立項している [Ibn Abī Ḥatīm 3-2: 66]。この人物の生没年は不明であるが、イブン・アビー・ハーティムの記事では、195/810-811 年に生まれ、277/890-891 年に死亡したイブン・アビー・ハーティムの父や、280/893-894 年頃に死亡したアブー・ズルア・ディマシュキーが彼から伝承を聞いたとされており、戦いのあった 151/768-769 年の時点で少なくとも 20 歳と考えるならば、80-90 歳まで生きている計算になるが、想定として不可能とまでは言えない。
- 3) Nahr al-Amīr. バスラ領域の運河。マンスールの命で掘削されたと言われ、「信徒の長の運河 (Nahr Amīr al-Mu'minin)」が省略されて、「アミール運河 (Nahr al-Amīr)」と呼ばれるようになったという [Futūḥ al-Buldān 362-363; Mu'jam al-Buldān 5: 318, s. v. "Nahr Amīr"]。
- 4) al-Naḍla. ハリーフアの年代記においてこの箇所ではしか言及されず、人物の確定には至っていないが、あるいは、サッフアーフおよびマンスールの時代にハワーリジュ派の掃討やホラーサーンでの反乱鎮圧に活躍したハーズィム・ブン・フザイマ Khāzīm b. Khuzayma のもとで前衛を務めたナドラ・ブン・ヌアイム・ブン・ハーズィム・ブン・アブド・アッラーフ・ナフシャルー al-Naḍla b. Nu'aym b. Khāzīm b. 'Abd Allāh al-Nahsharī のことか。ナフシャル族はタミーム族の一支族であり、ハーズィムがバスラで戦士を集めたことが語られている [Ta'riḫ al-Ṭabarī 3: 79, 123-124; cf. 高野 2008: 35-36; Ansāb al-Ashraf III 229, 249]。

ミール運河の戦いの時に彼らを目撃し、一団とともに彼らと戦った。彼ら [=ミード] は自分たちの軍船<sup>5)</sup>へと去ったが、彼らの手にあるものを使い尽くしてしまった[ので去った]という。[Ta'rikh Khalifa 426]

これらの記事には、ミードと呼ばれる人々、あるいは勢力が、149/766-767年から153/770年までの間に、一年おきに三度、おそらくはベルシャ湾から船でやってきて、バスラ近郊へと攻め寄せてきたことが語られている。このバスラ領域への海寇に関する記述は、他の年代記には見当たらず、バスラに在住していたハリーフア・ブン・ハイヤート独自の情報である。

この「ミード」は、史料の写本において、また校訂者や研究者によって、時に Mid, Mīdh あるいは Mayd, Mand として読まれる場合があり、その読みは定まっていないものの、先行研究によってスインド地方やヒンド地方との境域、あるいはそれらの面する海域に存在する民族、あるいは単純に海賊的な存在であると理解されてきた（以下、本稿では混乱を避けるため、日本語表記としては「ミード」に統一し、必要に応じてラテン文字転写を付記することとする。）。

ミードについてまとまった言及を行った最初の研究は、エリオットの『彼ら自身の歴史家が語るインドの歴史』の付録にあるミード（エリオットの表記では Meds）に関する考察であろう [Elliot 1867: 519-531]。エリオットはミードをズット (Zutt, エリオットの表記では Jats) と同様の存在と考えている。ズットは、スインド領域を故地とし、その後幾度かにわたってイラン、イラクなど西方に移住したと言われる民族であり、しばしばムスリム勢力に協力し、その下で戦ったことが年代記等に記されている [EI<sup>2</sup> 11: 574-575, s. v. "AL-ZUTT"]。エリオットの見解の基盤となっているのは、『歴史と伝説の概略 (Mujmal al-Tawārikh wa al-Qiṣas)』におけるズットとミードに関する記述であり、そこではその二つの集団が対になるような形で扱われている<sup>6)</sup>。それによると、彼らはスインドの地に古より

5) bawārij. 単数形は bārija. これについては、家島 2011-2: 37-38 でこの言葉に付けられている注釈が最も詳しい解説である。そこでは「軽装船、快速船、戦闘用の海船」を指すとされ、さらに、タバリーの年代記を引いて、「各船には一人の船長 (ishtiyām), 石油火器を専門に取り扱う戦闘員三名 (naffaṭ, naffaṭūn), 一人の船大工 (najjār, najjārūn), 一名のパン製造者 (khabbāz, khabbāzūn), 三九名の漕ぎ手兼戦士 (al-jadhhdhāfūn wa al-muqātila) たちの合計四五名が乗り組んでいた」とその実態を記述している [cf. Ta'rikh al-Ṭabari 3: 1582-1583]。

6) 『歴史と伝説の概略 (Mujmal al-Tawārikh wa al-Qiṣas)』は著者不明のベルシャ語で書かれた歴史書であり、520/1126年からの数年間の間に編纂されたことが本文の記述から判明している [EI<sup>r</sup> s. v. "MOJMAL al-TAWĀRIKH wa'l-QEṢAS"; Meisami 1999: 188-209]。この書の著者は、ミードとズットに関する記述について、ある古い書物からそれを知ったと記しており、それはアブー・サーリフ・ブン・シュアイブ・ブン・ジャーミウ Abū Ṣāliḥ b. Shu'ayb b. Jāmi' なる人物が、インド人の言葉からアラビア語へと翻訳し (az zabān-i Hindvāni bi-tāzi tarjamah kardah būd), そしてそれをジュルジャーノの図書館の管理人 (khāzin) であったアブー・アルハサン・アリー・ブン・ムハンマド・ジーリー Abū al-Ḥasan 'Alī b. Muḥammad al-Jilī (刊本ではジャラティール al-Jalati だが、エリオットの引くカトルメールの読みに従った [Elliot 1867: 100]) なる人物が、あるダイラム人の将軍のために 417/1026-27年にそれをベルシャ語に翻訳したものであるという

存在した、ノアの息子ハムの子孫からなる二つの集団であり、互いに戦いを繰り返していたが、あるときから共同の王を頂くことになったという [Mujmal al-Tawārikh 107-108; Elliot 1867: 103-105, 519-520]。エリオットはそのような伝説的な起源を語った後、バラズリーの『諸国征服の書』に依拠して、イスラーム勢力による西北インド遠征の際に、ミードと戦うかあるいは和平を結んだことを紹介し、またミードがヒジュラ暦四世紀/西暦十世紀の時点でもスインド地方に勢力を持っているとするマスウーディーやイブン・ハウカルなどの記述を紹介している。それ以降、エリオットの関心はミードを古代あるいは現代のいかなる民族に結びつけることができるか、という点に移ってしまうため、この初期イスラーム時代のミードに関してはそれほど深く分析されずに終わる。しかしながら、エリオットが示したズットとミードを類似するものと見なす理解は、その後のミード理解に大きく影響していると言える。

1886年に発表されたド・フーユの『ジブシーの歴史に対する一論考』は、ズットとジブシーとのつながりに焦点を当てた論考だが、基本的にはエリオットの理解を受け継いでおり、ミードについては「海賊行為によって生活している (lived by piracy)」と表現している [De Goeje 1886: 12]。1951年に出版されたホウラーニーの『アラブの航海』でも、「ミード (転写は Mayd) とクルク (Kurk) などのカッチ地方及びカティヤワル半島海賊たち (pirates)」として扱われている [Hourani 1951: 70]。

1936年に出版された『イスラーム百科事典』では、ミノルスキー V. Minorsky によって“MAND”として項目が立てられているが、“MAND”の後に(?)が付けられているほか、その定義も「アラブがスインドで見つけた人々 (a people whom the Arabs found in Sind)」とされているのみである [EI<sup>1</sup> 3: 236-237]。ミノルスキーはインダス川より南の地域に関してMANDに近い発音の地名がより古い時代の文献に現れるとして、この発音を正しい読みとして選択している。また、1991年に出版された『新版イスラーム百科事典』第六巻では、フリードマン Y. Friedmann とシュールマン D. Shulman により“MĒD”として項目が立てられており、ここでも、項の冒頭での定義部分では「アラブ征服期においてスインドに住んでいた人々」と特定を避ける方向で述べられている [EI<sup>2</sup> 6: 967-968]。

1960年に出版されたS. マクブール・アフマドの『イドリースィーの地理書の中のインドとその近隣領域』においては、ミードはひとつの民族というよりもむしろ地名として扱われている。ミードは地名として項目が立てられ、「ミードの島」はインド西岸部のカティヤワル半島やカッチ地方を指すとされているほか、別項ではそれがカッチ地方南岸に位置するマンドヴィ Mandvi にあたると述べられている [Ahmad 1960: 118-119, 121]。それが地名として扱われている理由は、彼が主に依拠したイドリースィーの地理書において、「ミードの島 (jazirat al-Mand)」として言及されているためであろう [al-Idrisi 180, 181]。しかし冒

↘ [Mujmal al-Tawārikh 107]。

頭に挙げたハリーフア・ブン・ハイヤートの例や、また本稿で参照する諸々の例から考えるならば、この「ミード」はほぼ間違いなく人間集団を指すものである<sup>7)</sup>。またアフマドはミードのことを人間集団としても項目を立てているが、そこでは地名として「ミードの島」の項目を参照するよう指示するほか、若干の史料や先行研究の引用でほぼ尽きており、その研究自体の目的が地理情報の解明であるということもあって、地名としての分析が主となっている [Ahmad 1960: 145]。

1996年に出版されたウインクの『ヒンド』においても、これらの人々の読み方はM-D以外には定まっておらず、ミードMidとマンドMandなど二つの集団が混同されている可能性を指摘する他は、史料的にも結論的にもそれ以前の研究の見解を修正するには至っていない [Wink 1996: 164-166]。

このように、以上に挙げた諸研究においても、このミードに関して決定的な議論を行うに至ってはいない状況である。また、冒頭に挙げたハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』に見られる記述についてはこれまでまったく検討されておらず、それゆえミード勢力の活動の「広がり」についても十分な分析が行われていない<sup>8)</sup>。

そこで、本稿では、このハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』に見られる記述を起点として、主に、インド方面への征服が本格化したウマイヤ朝期から、ミードの存在が歴史叙述から確認されなくなるアッバース朝中期までを対象に、イスラーム勢力とミードとの関わりを再検討する。その上でこのミードによるバスラ近郊への襲撃が、アッバース朝初期のイスラーム世界の政治的な動きとインド西岸部領域<sup>9)</sup>との関わりの中でどのような意義を持つ出来事であったのかについて考察を加えたい。

## I イスラーム勢力とミード

本章では年代記、征服記、地理書、古典辞書などの史料から、イスラーム勢力とミードと呼ばれる勢力がどのような関係を取ってきたかということについて整理してゆく。第一節においてはウマイヤ朝期におけるイスラーム勢力とミードの関わりを、第二節においてはアッバース朝期におけるイスラーム勢力とミードの関係を整理し、そして第三節では主に地理書

7) ただし、この人間集団に対する名称が地名に由来するものである可能性はある。また、後述するように、フワーリズミーによって三世紀前半に著されたとされる書物においても「ミードの島」が言及されている [Šūrat al-Ard 6, 95]。

8) 筆者の知る限りでは、ハリーフア・ブン・ハイヤートのこの記述に言及しているのは、サーリフ・アフマド・アルアリーによる初期バスラの地誌的研究のみである [al-'Ali 1986: 183]。ただし、そこでもアミール運河に関する情報の一つとして挙げられているにとどまる。

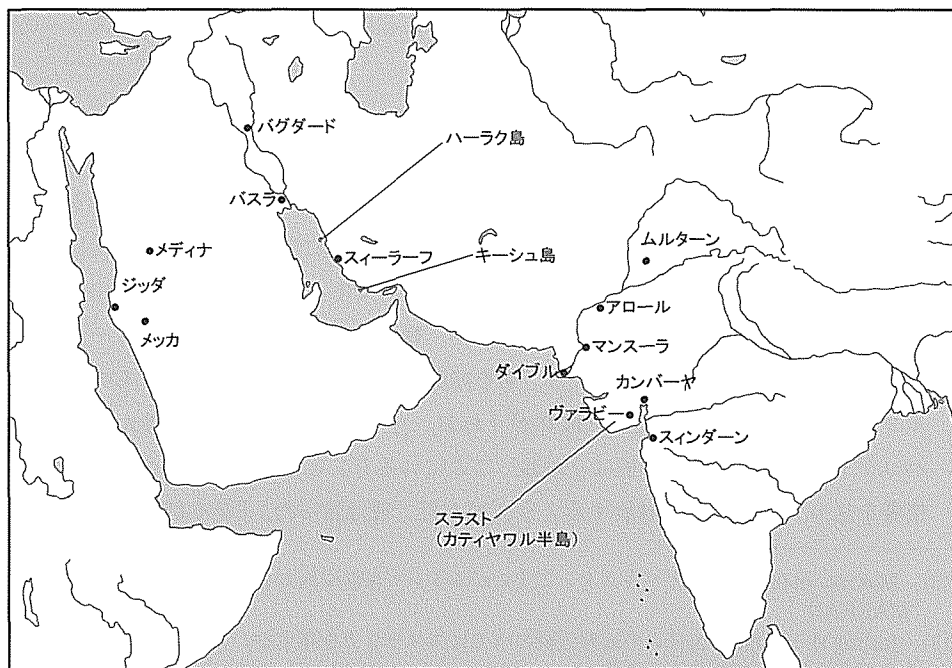
9) 本稿では、検討の主な対象となるスインドの海岸側地域および通常はヒンドとされるグジャラート地域をあわせて「インド西岸部」と表現する。これは、初期イスラーム時代においてはスインドとヒンドについての地理情報はそれほど完備されたものではなく、またスインドとヒンドがどこで分かれているかということについても確固とした基準がないための便宜上の方策である。

に見られるミードに関する記述を、最後に第四節ではアラビア語辞書におけるミードについての解説を見てゆくこととする。

### 1 ウマイヤ朝期におけるイスラーム勢力とミード

アラブ・ムスリムは、ムハンマドの死後に行われたリッダ討伐の余勢を駆る形でアラビア半島から外へと勢力を拡大し、ついには、東は中央アジア、インド西部から西は北アフリカ、イベリア半島に至る領域を支配下に置くまでに成長した。ミードがその勢力圏としていたと思われるインド西岸部領域も、比較的早い時期から征服の対象になっていたと伝承では伝えられている。

バラズリー『諸国征服の書』<sup>10)</sup> においては、第三代正統カリフであるウマルの時代から現在のカラチ周辺に存在していた港町ダイブル<sup>11)</sup>へと軍が派遣されていたと言われる [Futūḥ al-Buldān 432]。その後、何度もアラブ・ムスリムの軍勢がその地域で敵を破ったとの伝承は伝えられているものの、その支配の実態は明らかではない。ヒジュラ暦 40 年代



ミード関連地図

10) バラズリー『諸国征服の書』については、花田宇秋氏による全訳があり、本稿でもスインド地方の征服に関する部分について多くを参考としている [花田 2001]。

11) Daybul. 正確な位置は不明だが、インダス川河口に存在した都市であり、アラビア海/インド洋交易において重要な拠点となっていた。[Mu'jam al-Buldān 2: 495; EI<sup>2</sup> 2: 188-189, s. v. "DAYBUL"]

以降になると、「ヒンドの境域 (thagr al-Hind)」を統治する総督の任命が行われたようであるが、やはり具体的な支配の実態は不明であり、その統括領域についても確定は困難である。

ウマイヤ朝期に入るとイラク総督ズィヤード Ziyād によって派遣された指揮官がマクラーン<sup>12)</sup>を征服し、ここをその後の征服の拠点として軍営都市化 (maṣṣara) したようである [Futūḥ al-Buldān 433]。その後、ラーシド・ブン・アムル・ジュダイディー Rashid b. 'Amr al-Judaydi がマクラーンに赴任したが、50/670 年に「ミード」と戦って敗れ、死亡したという [Futūḥ al-Buldān 433] [Ta'rikh Khalifa 211]。これが史料中に伝えられる限りにおいて、イスラーム勢力とミードの初めての接触である。

インド方面に対する征服活動は、第二次内乱の勃発などに伴って停滞したものの、アラブ・ムスリム勢力は一進一退を繰り返しつつその支配領域を拡大していったようである。特にウマイヤ朝第五代カリフ・アブド・アルマリクと第六代ワリード一世のイラク総督であったハッジャージュ・ブン・ユースフ al-Ḥajjāj b. Yūsuf のもとで、この方面への征服はさらに促進されることになった。

92/711-12 年には、その後のインド方面の征服を惹起する一連の事件が起ったと伝えられるが、その端緒においてミードが大きな役割を担ったとされる。以下が、バラズリーの伝える経緯である。

その後ハッジャージュ [・ブン・ユースフ] は、ムジャーシウ al-Mujāshi' の後にムハンマド・ブン・ハールーン・ブン・ズィラーア・ナムリー Muḥammad b. Hārūn b. Dhirā' al-Namrī を [スィンド総督に] 用いた。彼が総督の地位にあったとき、ヤークートの島<sup>13)</sup>の王が、彼の国で生まれたムスリムの女性たちをハッジャージュに送った。彼女らの父親たちは既に死んでいたが、彼らは商人であった。彼は彼女たちに近づくことを望んだ。しかし、彼女たちが乗った船に、戦闘船に乗ったダイブルのミードの人々 (qawm min Mīd al-Daybul) が現れ、船を略奪した。そこで彼女たちのうちの一人はヤルブーア族<sup>14)</sup>の者であったが、彼女が「おお、ハッジャージュよ」と叫んだ。それがハッジャージュに届くと、彼は「おお、ここにいるぞ」と言った。それでダーハル<sup>15)</sup>に使者を送って、娘たちを解放するように頼んだ。彼は言った。「そうはいつでも、彼女

12) Makrān. 現在のイランとパキスタンにまたがるインド洋沿岸地方を指す。[EI<sup>2</sup> 6: 193-194, s. v. "MAKRĀN"]

13) Jazīrat al-Yāqūt. ムスリムの地理伝統の中ではスリランカを指すが、この部分で意図されている島がそれと同一であるかは不明。

14) Yarbū'a. ヤルブーア族はタミーム族の一支族 [高野 2008: 35-36]。ただし、この逸話ではサキーフ族出身の総督ハッジャージュとのつながりがあるように語られているため、レヴィ・デラ・ヴィダの指摘している「サキーフ族のヤルブーア」との関わりがあるとも考えられるかもしれない [EI<sup>2</sup> 11: 283-284, s. v. "YARBŪ'"]。

15) Dāhar. アラビア語史料において当時スィンドを支配していたとされる王。ダーハルの父チャチュは、前王家の臣下であったが、王の死後、未亡人の王妃と結婚して王位を篡奪した。ダーハルはそのチャチュと前王の妃の間に生まれた子供であるという。ダーハルはこの一件の直後、ムハンマド・ブン・アルカースィムの軍と戦って敗れ、死亡した [稲葉 1999: 160-161]。

らをとらえたのは盗賊 (luṣūṣ) であるから、私は彼らにどうこうすることはできない」と。それでハッジャージュは、ウバイド・アッラーフ・ブン・ナブハーン 'Ubayd Allāh b. Nabhān にダイブルを襲撃させたが、彼は殺された。そこで彼は、その時オマーンにいたブダイル・ブン・タフファ・バジュリー<sup>16)</sup>に書き送って、ダイブルへ向かうように命じた。彼 [=ブダイル] が彼らに出会った時、彼の馬が彼を乗せたまま逃げだした。敵が彼を取り囲み、彼を殺した。ある者たちは、ズットが奇襲で彼を殺したのであると言っている。[Futūḥ al-Buldān 435-436]

この出来事が発端となって、92/710-711年に、イラク総督ハッジャージュはムハンマド・ブン・アルカースィム Muḥammad b. al-Qāsim をスインドへ派遣し、彼がダイブルを攻略したという。この記事は、イスラーム勢力による本格的なスインド、ヒンド征服の発端を語る逸話として記憶され、この記事に登場する「ミード=盗賊/海賊」という図式はこれまでのミード理解に大きな影響を与えているが、それがこのような「物語」の一部であることには注意が必要だろう。

それに続いて『諸国征服の書』では、ムハンマド・ブン・アルカースィムによるスインド・ヒンド領域の征服が語られているが、そこにミードに関する記述は現れず、その征服した土地も、後にミードの本拠として語られるカティヤワル半島周辺ではなく、ダーハルの支配していたスインド北部が中心となっている [Futūḥ al-Buldān 435-439; 稲葉 1999: 160-163]。このムハンマド・ブン・アルカースィムのスインド征服に関するバラズリーの記述は、いくぶん伝説的な要素が濃厚であり、またハッジャージュがイラクから逐一ムハンマド・ブン・アルカースィムに対して指示を与えている様子が描かれるなど、この記述について細部までそのまま実際に起こったこととして考えるには難がある。「ダイブルのミード」についても信頼できる情報であるとは言いきれないだろう。

その後、95/714年にイラク総督ハッジャージュが死亡し、その報が届いた際のムハンマド・ブン・アルカースィムの行動の記述の中に、再びミードが登場する。

(ムハンマド・ブン・アルカースィムは) バイルマーン<sup>17)</sup>に一軍を送ったが、彼らは戦わず、従属した。スラスト<sup>18)</sup>の人々 (ahl Surast) も彼と講和した。その地は現在バスラの人々の襲撃地である (wa-hiya maghẓā ahl al-Baṣra al-yawma)。そこの人々はミード (Mid) で、彼らは海を切断していた (yaqṭa'ūna fi al-baḥr)。[Futūḥ al-Buldān 440]

16) Budayl b. Ṭahfa al-Bajli. 詳細は不明だが、イブン・アサーキルの伝えるところによると、ハッジャージュがイラク総督に赴任し、スーラ・ブン・アブジャール Sūra b. al-Abjar をオマーン総督に任命したとき、ペルシャ湾の島を拠点に第二次内乱期から勢力を持っていたサイード・ブン・イヤーズ Sa'id b. 'Iyādh らを討伐するために、一団の船団とともにブダイルを派遣したが不首尾に終わったという [Ibn 'Asākir 21: 280-281]。

17) al-Baylmān. イブン・フルダズビフはスインドの諸地方のひとつとして挙げているが、具体的な場所は不明 [Ibn Khurdādhbih 57]。

18) Surast. Surāshtra, すなわち現在のカティヤワル半島を指す。

すなわち「スラスト (=カティヤル半島)」にミードが居住しており、彼らが海に乗り出してムスリムたちに対して海路を断っていたということがわかる。

上記のように、スラストのミードとムハンマド・ブン・アルカースィムの間では和平が成立したと思われるが、これは恒久的な関係とはならなかったようである。ハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』の中にはウマイヤ朝第十代カリフであるヒシャームの時代のスインド総督に関連して、ミードに関する記述が現れる。

ミードが [スインド総督] ハカム [・ブン・アワーナ] al-Ḥakam b. 'Awāna を殺した (fa-qatalat al-Midh al-Ḥakam)。それでムハンマド・ブン・イラルル・カルビー Muḥammad b. 'Irār al-Kalbī が後を継いだ<sup>19)</sup>。[Ta'riḫ Khalifa 359]

ミードによってウマイヤ朝のスインド総督が殺されたということは、両者が再び戦闘を行うような関係に戻っていたということであろう。これは、同じくハリーフア・ブン・ハイヤート『年代記』の122年の条に、ハカムがスインドで没したとの記述があるため、122/739-740年のことであると考えられる [Ta'riḫ Khalifa 354]。

以上のように、ウマイヤ朝期においては、インド西岸部領域におけるアラブ・ムスリムの軍勢に対してミードが在地勢力として対抗し、時に戦ってアラブ・ムスリム軍を破り総督を討ち取るまでに至ることもあったほか、時にはアラブ・ムスリム勢力と和平を結ぶこともあったということが確認された。

## 2 アッバース朝期におけるイスラーム勢力とミード

ウマイヤ朝政権が崩壊し、アッバース家がカリフ位を握って統治を行うようになった後、初めてミードが史料に現われるのは141/758-759年におけるハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』中の記述である。

その年 (141/758-759年)、アブー・ジャアファル [=マンスール] は、ムハンマド・ブン・アビー・ウヤイナ<sup>20)</sup>を海事に任命した (fi-hā wallā Abū Ja'far Muḥammad b. Abī 'Uyayna al-baḥr)。彼は、海中の島であるカイス<sup>21)</sup>の町に駐屯した。そこにミードの船団 (marākib al-Midh) がやってきた。彼自身は彼らに向かって出撃せず、彼の息子が出撃したが、ムスリムたちの集団は殺され、ムハンマド・ブン・アビー・ウヤイナは

19) ヤアクービーによると、ハカム・ブン・アワーナ死後の総督職については、ムハンマド・ブン・アルカースィムの息子であるアムルとムハンマド・ブン・イラルルの間で対立があったが、イラク総督ユースフ・ブン・ウマルが同族の誼みでアムルを総督と認めたという [Ta'riḫ al-Ya'qūbī 2: 389]。

20) Muḥammad b. Abī 'Uyayna b. Muḥallab b. Abī Ṣufra. ウマイヤ朝期にバサラなどの総督職についたムハッラブ・ブン・アビー・スフラの孫にあたる人物。マンスールの時代にライの総督となったとされる [ET<sup>2</sup> 7: 195, s. v. "MUḤAMMAD B. ABĪ 'UYAYNA"]。ムハッラブ家はベルシャ湾領域をルーツとすると言われており、海事に関しても能力を認められていたと考えられる。

21) Qays. キーシュ島。ホルムズ海峡を抜けてベルシャ湾に入った先にある島で、ベルシャ湾における重要な中継地点であった [Mu'jam al-Buldān, 4: 422, s. v. "Qays"; Le Strange 1905: 256-257]。



町を空にした。敵 (al-'adūw) はそこを荒廃させ、今日に至るまで廢墟となっている。

[Ta'rikh Khalifa 419]

この記述から、遅くともこの時期において、ミードがホルムズ海峡を越えてペルシャ湾内部へと侵入する事が可能になっていたことがわかる。

この後本稿の冒頭に紹介した史料で示されているように、149/766-767年、151/768-769年、153/770年と三度にわたってミードがバスラ領域へと侵入している。おそらくこれに関わる記述と思われるのが、ズバイル・ブン・バッカー<sup>22)</sup>が『クライシュ族の系譜と情報大全』の中で記しているアブド・アッラーフ・ブン・アースィム・ブン・ムンズイル・ブン・アッズバイル・ブン・アルアウワーム 'Abd Allāh b. 'Āṣim b. Mundhir b. al-Zubayr b. al-'Awwām の事跡の中の一節である。

彼はバスラに住んでおり、そこで死亡したが、偉大なシャイフであった。かつてミードがスプザーン<sup>23)</sup>に到着し、そこを通過してバスラへと向かってきた時、彼とそこで遭遇した。彼は旗を据え付け (i'taqada rāya), 農民を集めて (jama'a al-akara), バスラの人々がやってくるまで彼らと戦った [Jamharat Nasab Quraysh 256]

このアブド・アッラーフ・ブン・アースィムの正確な活動年代を人名録などからは裏付けることができないものの、この記述はおそらくハリーフア・ブン・ハイヤートの年代記に記されたミードのバスラ攻撃の記事と対応するものであろうと思われる。

また、ミードという名前は登場しないものの、同じくハリーフア・ブン・ハイヤートの年代記のヒジュラ暦 149 年の条、ミードの来襲に関する記事の後に以下のような記述がある。

この年 (149/766-767 年)、敵 ('adūw) がハーラク<sup>24)</sup>でアブー・ジャイファル Abū Jayfar と出会った。アブー・ジャイファルと彼の船の乗員は捕えられた。[Ta'rikh Khalifa 425]

ハーラクはペルシャ湾内、現在のブーシェフルの近くに位置する島であって、この記述もまたミードの侵寇と関連したものであり、ここで語られた「敵」はミードを指すと考えられ

22) al-Zubayr b. Bakkār b. 'Abd Allāh b. Muṣ'ab b. Thābit b. 'Abd Allāh b. al-Zubayr b. al-'Awwām. ズバイル家の出身で系譜学者として名高い人物。アッバース朝カリフに有識を買われ、バグダードに何度も招かれたほか、カリフ・ムタワッキルの息子ムワッファクのために逸話集『ムワッファキヤート』を編纂した。その後、メッカのカーディーを務め、256/869-870年に同地で死亡した [cf. *EI*<sup>2</sup> 11: 551-552, s. v. "AL-ZUBAYR B. BAKKĀR"]。

23) Subdhān. バスラから4ファルサングのところにある町。写本ではこの地名部分は不明瞭であるというが、校訂者は注釈においてこのスプザーンを挙げており、それが妥当であると考えられる [cf. *Mu'jam al-Buldān*, 3: 183, s. v. "Subdhān"]。

24) Khārak. ペルシャ湾内、イラン南西部ファールス地方のアルダシル・フッラフ近くに位置する島。キーシュ島と並んでペルシャ湾を經由する交易の重要な中継地点となっていたという [Le Strange 1905: 261]。イブン・フルダズビフはバスラから東方へと向かう旅程の中で、バスラから発した後、次にハーラク島に言及しており、バスラからの距離は50ファルサングであるとしている [Ibn Khurdādhbih 61]。またヤーカートは、ムハッラフ家の祖であるアビー・スフラはハーラク島の出身であると記している [Mu'jam al-Buldān 2: 337]。

る。時系列と記事の順序が逆転してはいるものの、149年にここでミードが現れたという記述がなされていることは、おそらく149年にバスラを襲撃するためにペルシャ湾内を北上していたことを意味しているのであろう。

ミードに直接言及した記述は、これ以後70年ほどの間についての史料の中には見られない。その後、アッバース朝第八代カリフ、ムウタスィムの時代について、ミードに関する記述が存在している。バラズリーは、バルマク家の後裔であるイムラーン・ブン・ムーサー・ブン・ヤフヤー・ブン・ハーリド・ブン・バルマク<sup>25)</sup>が、221/836-837年にスィンド総督に就き、ミードに対して攻撃を行ったことを記述している。

イムラーンはミード (Mid) を襲撃し、三千人を殺した。また、ミードの堤防 (sikr al-Mid) として知られる堤防を築き、アロール<sup>26)</sup>の河岸に軍隊を集結された ('askara 'Imrān 'alā nahr al-Rūr)。その後、近くにいたズットに呼びかけると、彼らはイムラーンのもとに加わった。(中略) 彼はミードを襲撃したが、その時ズットの主だった者たちが彼とともにいた。イムラーンは、彼ら [=ミード] の湿地に流れ込む川へと、海からの運河を掘削して、彼らの水が塩気を含むようにした。そうしてイムラーンは彼らを襲撃した。[Futūḥ al-Buldān 445-446]

ここでは、イムラーンがミードと戦って勝利し、彼らの多くを殺したこと、また、その後の攻撃が、湿地と海のある地域、おそらくはカティヤワル半島の北に位置するカッチの湿地だと推定されるが、そこを舞台に行われたことが確認できる。

また、同じくバラズリーが伝える以下の記事も、ムウタスィム時代 (218-227/833-842年) の出来事として記されているが、その正確な年代は明らかではない。

ファドル・ブン・マーハーン<sup>27)</sup>が死亡すると、ムハンマド・ブン・ファドル・ブン・マーハーンがその後を継いだ。彼は七十隻の軍船 (bārija) を率いてヒンドのミード

25) 'Imrān b. Mūsā b. Yaḥyā b. Khālid b. Barmak. ラシード期に宰相として政権の中樞を担いながら後に排除されることになったバルマク家の後裔の一人。父ムーサーはヒジュラ暦176年にシリア総督に任命されたことがタバリーの記事から知られるが [Ta'riḫ al-Ṭabari 3: 625]、バラズリーによると、ムーサーがマアムーンの時代にスィンドの境域に任命され、その後221/836-837年にムーサーが死ぬと、その子であるイムラーンが後任のスィンド総督としてムウタスィムに認められたということになっている [Futūḥ al-Buldān 445]。しかしタバリーのヒジュラ暦216年の記事では、このとき派遣されたのはイムラーン・ブン・ムーサーであるとされている [Ta'riḫ al-Ṭabari 3: 1105]。

26) al-Rūr. アロールは、現在のパキスタンのサッカ爾 Sukkur の対岸、ローリー Rohri 郊外にあった都市。当時のスィンドにおける政治的経済的中心の一つであった [Mu'jam al-Buldān 3: 79, s. v. "al-Rūr"; EI<sup>2</sup> 1: 679, s. v. "ARÜR"; EI<sup>3</sup> s. v. "Arūr"]。

27) al-Faḍl b. Māhān. クライシム族サーマ家のマウラー。タヌーヒー『苦難の後の救済』に採録された逸話の中に、彼がインド生まれのムスリムから伝えたとされるものがあり、そこで彼は「スイラーフの人 (al-Sirāfi)」「海の遠方諸地方の海路についてよく知っているもの」として言及されている [al-Faraj ba'da al-Shidda 4: 300]。おそらくはペルシャ湾交易の中心地であったスイラーフの船乗りに関連する人物が用いられていたと考えられる。

(Mid al-Hind) へと進撃し、その人々を殺し、ファーリー<sup>28)</sup>を征服して、スィンダーン<sup>29)</sup>に帰還した。[Futūḥ al-Buldān 446]

このようにムウタスムの時代にも、イスラーム勢力が再び攻勢に出て、ミードの支配する領域で勝利を収めたということが語られている。

しかしこの時代以降については、ミードに関する情報は、年代記などの歴史情報の中には見られなくなってゆく。ヒジュラ暦三世紀/西暦九世紀中葉までには、スィンドそのものがクライシュ族の後裔と言われるハッパール家などのもので、半独立の状態にあったということ、また、スイースターンを根拠とし、東部イランを支配したサッフール朝の勢力が陸路を抑えたことによって、アッバース朝中央からスィンド地域に対しての統制を及ぼしにくくなったということも、その原因であろう [Wink 1996: 211-212; *EI*<sup>2</sup> 9: 632-638, s. v. "AL-SIND"]。しかし、後述するように、ヒジュラ暦六世紀/西暦十二世紀に生まれたスィンド出身の学者がミードという存在を知らなかったという状況から考えると、ミードと呼ばれた人たちは、表舞台から消えていったと考えるのが妥当であるように思われる。

### 3 地理書等におけるミードの記述

次に、上記のアッバース朝中期以降に著されることになる地理書において、このミードがどのように記述されているかを確認してゆこう。

ヒジュラ暦三世紀前半に活躍した数学者・天文学者であったフワーリズミーは、プトレマイオスの『地理学』をベースとしたと考えられる、都市や島の経度・緯度の記述を中心とした著作において、「ミードの島 (jazīrat al-Mīdh)」として言及している [Šūrat al-Arḍ 6, 95]。そこではインドの島の一つとして挙げられているが、その中に三つの都市があるとも記されている。

ヒジュラ暦三世紀後半に地理書を著したイブン・フルダーズビフは、ウーティキーン<sup>30)</sup>を

28) Fāli. فالي. イブン・フルダーズビフはスィンドの諸地方のひとつとして Qāli قالي を挙げているが、具体的な場所は不明 [Ibn Khurdādhbih 57]。ただしこの箇所の前後を考慮すると、カンバーヤ Kambāya の周辺かカティヤワル半島の周辺だろうか。ウィンクはこれを Māli (Qallāri) と転写しているが、それがどこにあるかを具体的に示してはいない [Wink 1990: 165]。

29) Sindān. ミノルスキーや S. マクブール・アフマドによると、スィンダーンは現在のインド西海岸のダマン (Daman) の南にあるサンジャーン (Sanjān, Sanjam) の町であるとし、家島彦もこれを踏襲している [Minorsky 1937: 245; Ahmad 1960: 102; 家島 2011-1: 356-357]。一方、ウィンクはこれを現在のカッチ県南部のアブダーサに比定している [Wink 1990: 178]。イブン・アルファキーフは、スィンダーンとザンジュの湾 khaljān Sindān wa Zanj として言及しており [Ibn al-Faḥḥ 63]、また、イブン・ハウカル『世界の姿 (Šūrat al-Arḍ)』に採録されている地図においては、スィンダーンがカンバーヤよりも遠方として描かれている [Ibn Hawqal 275] が、スィンダーンをカンバーヤ湾の入り口にあると考えると、この順序も理解可能となり、前者の説が正しいと考えられる。

30) Ūtikīn. 不詳。前後の記述から、インダス川より南の、インド西部の一地域と推測される。S. マクブール・アフマドはイドリースーの記述を基礎に、これを Oykman と読んだ上で、カティヤワル半島西北部の半島に位置する Okhamandal にあたるとしている [Ahmad 1960: 119-121]。

ヒンドの始まり (awwal arḍ al-Hind) と紹介した上で、「そこにはウタート・マルダ (Utāt Marda) という人々がおり、彼らは盗賊である、また、そこから2ファルサング行ったところには、ミード (al-Mayd) が住んでおり、彼らもまた盗賊 (luṣūṣ) である」と述べている [Ibn Khurdādhbih 62]。

ヒジュラ暦四世紀前半に地理書を著したイスタフリーは、「ミードはインダス川 (Mihrān) 沿岸、ムルターン<sup>31)</sup>から海岸までの地域におり、陸ではインダス川とカームフル<sup>32)</sup>の間に、多くの牧草地 (marā'in) と居住地 (mawāt'in) を持っていて、彼らの数は多い」と記している [al-Iṣṭakhri 176]

ヒジュラ暦四世紀前半に活躍したマスウディーは、303/915-916年に実際にインド西北部を訪れているが、彼はその百科全書的著作の縮約版『黄金の牧場』において、「ムルターンの周辺にミード (mand) と呼ばれる部族 (jins) がおり、戦いが多い。彼らはインドの一種族である (hum naw' min al-Sind)」と述べている。[Murūj al-Dhahab 1: 200]

シチリア王国のロジエール二世に仕えたイドリースーは、548/1154年に完成した世界地誌『世界各地を深く知ることを望む者の楽しみの書 (Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fi Ikhtirāq al-Āfāq)』において、以下のように述べている。

この [カームフルの] 荒野の諸方には、ミード (al-Mand) と言われる人々がいる。ミードは徒歩の集団で、この荒野の諸方に庇護を求めて行く。彼らの牧草地 (marā'i) と放牧地 (jawlān) はカームフルまで続いている。彼らは人々の数が多く、集まりは非常に密である。彼らはラクダやヒツジを所有し、ほとんどの時間を、インダス河岸のアロール al-Rūr までの場所、あるいはそれより遠く、マクラーンとの境の近くまで到達するほどの場所まで、それらを放牧しに行くのである。[al-Idrisī 170]

また、上述のように「ミードの島 (jazīrat al-Mand)」としても言及されている [al-Idrisī 180, 181]

このように、地理書の記述は概ね彼らの居住地をインダス川周辺とし、海事に従事するというよりはむしろ放牧生活を行う民として彼らを描いている。

#### 4 辞書におけるミードの記述

最後に、前近代に編纂されたアラビア語辞典における「ミード」についての説明を確認しよう。西暦10世紀(ヒジュラ暦4世紀)に編纂されたアズハリーの『言語新編 (Tahdhīb

31) Multān. インダス中流域にある都市。ヒジュラ暦90年代(西暦710年代)にムハンマド・ブン・アルカースィムによって征服された後、インド西部におけるイスラーム勢力の支配の根拠地のひとつとなった [EI<sup>2</sup> 7: 548-550, s. v. "MULTĀN"; Wink 1996: 186-188]。

32) Qāmḥul. イスタフリーは、カームフルとサイムール Ṣaymūr を結ぶ線が、ヒンド地域の始まりであるとしているため、インダス川以南の地域にある町と考えられる [al-Iṣṭakhri 176; Wink 1996: 178]。マクプール・アフマドは、これを Bihlmāl の語形が崩れたものと見なし、ラージャスターン州の Bhīnmal に比定している [Ahmad 1960: 91-93]。

al-Lugha)』では、M-Y-Dの項目として以下のように記述されている。

ミード mid。ライス al-Layth が言うにはミーズ midh である。テュルクと同様の地位にあるヒンドの民族である (jil min al-Hind bi-manzilat Turk)。海においてムスリムを襲う (yaghzūna al-muslimīn fi al-Baḥr)。[Tahdhīb al-Lugha 15: 31]

ここで引用されているライスはアッバース朝初期に活躍した文献学者ライス・ブン・ムザッファル al-Layth b. al-Muzaffar と考えられる [EI<sup>2</sup> 5: 711, s. v. "AL-LAYTH B. AL-MUZAFFAR"] が、海においてムスリムを襲うという点が示されている。

また、アラビア語辞典として最も名高いイブン・マンズールの『アラブの言葉 (Lisān al-'Arab)』においてもまったく同様の説明となっている [Lisān al-'Arab 5: 48]。

ヒジュラ暦 12 世紀/西暦 18 世紀に編纂されたズバイディー『辞書の宝石でできた花婿の冠 (Tāj al-'Arūs min Jawhar al-Qāmūs)』においてもほぼ同じ説明が繰り返されているが、それに加えて、西暦十三世紀に活躍したラホール出身の辞書学者サガーニー<sup>33)</sup>の言葉が引用されている。

サガーニーが言った。私は彼らのことを知らず、聞いたこともない。アズハリーがライスからそれをもたらした。彼はそれを否定しなかった。(qāla al-Ṣaghānī: lam a'rifuhum wa lam asma'u-hum. wa awrada-hu al-Azharī 'an al-Layth, wa lam yunkir 'alay-hi) [al-Zubaydī 9: 479]

これによると、ミードが存在したとされる地域出身の辞書学者がその言葉を知らなかったということになる。この頃までに、ミードと呼ばれる集団は姿を消していた、あるいは別の名前でのみ知られるようになったものと推測することができるだろう。

以上、年代記等の歴史叙述、地理書、辞書からミードに関する記述を拾い集め、その記述を整理した。実際にミードとの戦いが行われていたウマイヤ朝期、アッバース朝初期の記述においては、彼らが海においてその勢力を誇っていたことが強調されている。一方、アッバース朝中期以降に書かれた地理書などの記述では、彼らがインダス川付近で遊牧を行うような人々であるという認識が一般的になるようであり、それまでの記述と完全に乖離するものではないとはいえ、一定のズレが見られる。本稿の主題であるアッバース朝初期におけるミードの動向を分析するためには、当然ながら前者の視点が重要になる。次章では、アッバース朝初期のバスラとインド西岸部の関係を中心にミードのバスラ襲撃がいかなる意義を持っていたか、ということについて検討してゆこう。

33) al-Ṣaghānī. 577/1181年にラホールで生まれ、ガズナで学んだ後、メッカ、メディナ、アデンなどを経て、615/1218年に、バグダードにやってきた。その後、カリフの使者としてインドとの往復を繰り返した後、650/1252年に死亡した。アラビア語学者として高名であり、前代の辞書学者の著作の誤りを修正するものをはじめ、多くの著作を残している [EI<sup>2</sup> 8: 820-821, s. v. "AL-SAGHĀNĪ"]。

## II アッバース朝初期の政治情勢とバスラの海寇

前章ではミードについて、それが主にアラビア語史料においてどのような形で現れているかを確認した。そこで本章では、冒頭に挙げたバスラ領域におけるミードの海寇についてどのように理解すればよいのかという点について、ヒジュラ暦二世紀/西暦八世紀中葉のバスラ領域、ペルシャ湾を経てインド洋（アラビア海）、そしてインド西岸部に至る領域を巡る情勢を考えあわせることで明らかにしてゆきたい。

### 1 マンスールとマフディーによるバスラでの海事に関する動き

タバリーがワーキディー<sup>34)</sup>から伝えるところによると、151/768-769年にクルク Kurk と呼ばれる人々によって、アラビア半島西岸のジッダが攻撃されたという [Ta'rikh al-Ṭabari 3: 359]。このクルクについては詳しいことはわからないが、ド・フューはミードの一支族であると見なしている [De Goeje 1886: 12]。また、マルワズイーの記述によると、海路でインド方面からアラビア半島へ向かう途中に「クルクの島 (jazirat al-Kurk)」を通るとされている [Minorsky 1942: i]<sup>35)</sup>。

153/770年には、前年末にメッカ巡礼を行っていたマンスールが、上記の攻撃の話を受けて、自らバスラに出向き、クルクに対して遠征を行う準備をしたということが語られている [Ta'rikh al-Ṭabari 3: 370]。さらにこれと対応する記事として、ヒジュラ暦三世紀半ばに『知識と年代の書』を著したファサウィ<sup>36)</sup>は、その書の中の年代記的部分のヒジュラ暦 153年条に、この年マンスールが巡礼から戻ってバスラに来て、「スインドとの戦いのために海軍を準備させた (wa-jahhaza jaysh fī al-baḥr li-qitāl al-Sind)」ことを記している [al-Fasawi 1: 139]。

これらの記述から、マンスールがクルクと呼ばれる人々のジッダ攻撃に対抗して、海路によるスインド方面への遠征をバスラから送り出そうと企図していたことがわかる。この遠征

34) al-Wāqidī, Muḥammad b. 'Umar b. al-Wāqid. 130/747-748年頃メディナに生まれた、サフム族のマウラーの出身の高名な伝承収集者、歴史家。180/796年にバグダードに移住し、その後アッバース朝カリフによってカーディーに任命された。207/822年にバグダードで死亡 [EP<sup>2</sup> 11: 101-103, s. v. "AL-WĀQIDĪ"; Ibn Sa'd 7: 603-611]。

35) ただしミノルスキーはクルクとミードは混同されており、さらにクルクはキルワ Kilwa のことを指すものであって、タバリーの記述も事実としてはキルワから来た人々によると考えている [Minorsky 1942: 64]。しかしながら、本稿で指摘しているように、クルクの攻撃とスインドへの攻撃が連動していると考えられるため、ミノルスキーの説は少なくともこの部分についてはあたらぬであろう。

36) Abū Yūsuf Ya'qūb b. Sufyān al-Fasawī. 伝承学者。イランのファールス地方にあるファサーにおいて 190/805-806年頃に生まれ、成年後に伝承収集のために故郷を離れてメディナへと移り住んだ。219/834年に各地への旅を始め、エジプト、シリア、イランなどを回って最終的に故郷のファサーに戻り、同地で 277/890年に死亡したという（バスラで死亡したとする伝承もある） [al-Fasawi 1: 7-22]。

が実際に行われたかどうかは記述がなく、おそらく実行に移されなかったのではないかと思われるが、このクルクの攻撃とマンスールの対応は、ハリーフア・ブン・ハイヤートの年代記に書かれたミードのバスラ攻撃と同じ時期に起きたものであり、この二つの出来事は連動したものとして考えるのが妥当であろう。すなわち、上述のド・フーユの推定と同様に、クルクはミードと同じ人々を指すか、それに近い勢力、少なくともスインド/ヒンド地方を根拠とする人々であり、ミードのバスラ領域攻撃と連動する形でジッダを攻撃したと考えられる<sup>37)</sup>。

この後、マンスールは155/771-772年に、バスラとクーファにおいて塹壕(khandaq)と市壁(sūr)を作らせている[Ta'rikh al-Ṭabari 3: 374-375]。特にバスラに関しては、ミードによる攻撃が念頭にあったものかもしれない。

ヒジュラ暦158/774-775年にマンスールが死亡し、その子マフディーがカリフ位を継ぐと、その翌年159/775-776年には早くも、アブド・アルマリク・ブン・シハーブ・ミスマイー'Abd al-Malik b. Shihāb al-Misma'iを長とする遠征軍が、バスラからヒンドへと送られている[Ta'rikh al-Ṭabari 3: 460-461]。

その記事では、この遠征軍にはバスラの義勇軍が加えられたほか、700人シリアの兵士を加えたことなどが語られている。このことから、弱体であったベルシャ湾艦隊に、バスラを拠点として活躍する船乗りや地中海方面で海戦に実績を持っていた人々を加えることで強化し、マンスール期には結局実行できなかったスインド/ヒンド遠征を実現したのではないかと推論することができるだろう。

その船団は翌160/776-777年にバールバド<sup>38)</sup>に到着し、その町を征服し、破壊したが、天候不良と疫病の発生のために撤退を余儀なくされ、多くの兵を失いながらバスラまで帰り着いたことが語られている[Ta'rikh al-Ṭabari 3: 476-477]。

このように、マンスールの治世の中頃からマフディーの治世の初めまで、スインド方面から襲来していると思われる勢力に対して、アッバース朝がバスラを中心に対応していたことが確認できる。

37) ワーキディーはクルクの襲撃当時メディナに居住しており、これはその地で見聞した情報に基づいたものであると思われる。また、ファサウィーは長らくメディナで学問を行っていた。一方、ハリーフア・ブン・ハイヤートも自らのホームタウンであるバスラについての情報を伝えている。ウマイヤ朝後期、アッバース朝初期の各地方についての情報に関して、それぞれの編者がどの情報を取り上げるかについての基準は、明確には見えてこないが、その著者や伝承者が慣れ親しんだ地方の情報に偏る傾向がある。この事例の場合も、それぞれがそれぞれの身近の情報を伝えているに留まり、それらの関連する情報を一つの場所にまとめるということが行われなかったのであろう。

38) Bārbad. ウィンクはカティヤワル半島からカンバーヤ湾を挟んで東側にある都市とする[Wink 1990: 210]が、おそらくは、後述するNārindと同じ場所を指す。あるいは東方からカンバーヤ湾に注ぐNarmada川に由来する可能性もあるかもしれない。

## 2 ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの反乱とスインド/ヒンド情勢

ここでもう一つ、バスラ領域、ペルシャ湾、インド洋（アラビア海）、そしてインド西岸部領域の情勢に関わる事件を取り上げておきたい。それは145/762-763年に発生したハサン系のアリーの子孫であるムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ Muhammad b. 'Abd Allāh とイブラーヒーム・ブン・アブド・アッラーフ Ibrāhīm b. 'Abd Allāh による反乱である。ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフはメディナで反乱を起こし、それと機を同じくしてその兄弟イブラーヒーム・ブン・アブド・アッラーフがバスラで蜂起したが、さらにクーファ、エジプト、ホラーサーンにおいても呼応する動きがあったという<sup>39)</sup>。

反乱自体は146/763-764年までに鎮圧されたが、この反乱から派生してスインド/ヒンドにおいて起こった出来事についての逸話が、タバリーによってヒジュラ暦151年の条に記されている [Ta'rikh al-Ṭabari 3: 360-364]。この逸話は引用するにはやや長すぎるものであるので、以下に、記述の概略という形で示すこととしたい。

この反乱の最中、バスラからスインドへ、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの息子アブド・アッラーフが送られた。この時のスインド総督は、ハザールマルド Hazārmard の異名を持つウマル・ブン・ハフス・スフリー<sup>40)</sup>であったが、彼はアリー家の支持者であり、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフにバイアを行って、忠誠を誓っていたため、彼のもとに息子を送り込んだのである。ウマル・ブン・ハフスは、彼を受け入れ、人々に彼に対してバイアを行かせた後、彼の安全のために、ムスリムではないが、神の預言者の崇拝者であって、信頼できる人間であったスインドの王のもとに彼を送った。

ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフとイブラーヒーム・ブン・アブド・アッラーフの反乱が鎮圧され、二人が殺されると、マンスールは前者の息子であるアブド・アッラーフがスインドに逃れていることを知って、ウマル・ブン・ハフスのもとにその旨を書き送った。ウマル・ブン・ハフスの親族の一人が自ら罪をかぶって犠牲になると申し出てマンスールのもとに送られ、処刑されたことで、ウマル・ブン・ハフス自身は難を逃れた。一方マンスールは、ウマル・ブン・ハフスに替えてヒシャーム・ブン・アムル Hishām b. 'Amr をスインドの総督として送り、ウマル・ブン・ハフスはイフリーキーヤの総督へと配置換えとなった。

新たにスインドに赴任したヒシャーム・ブン・アムルは、当初アブド・アッラーフ・

39) 反乱の概要については *EI*<sup>2</sup> 7: 388-389, s. v. "MUḤAMMAD B. 'ABD ALLĀH B. AL-ḤASAN" を参照。また、この反乱については Elad 2004 が最も網羅的な研究となっている。

40) 'Umar b. Ḥafṣ b. 'Uthmān b. Kabīsa b. Abī Ṣufra. いわゆるムハッラブ家の出身であり、ホラーサーンでアッバース朝革命に加わったといわれる。その後アッバース朝初代カリフ・サッファーフのもとでバフラインの総督、次いでバスラ総督を務めた。マンスールのもとでもバスラ総督を務めた後、スインド総督に転任し、151/768年にはイフリーキーヤ総督へと転任したが、153/770年に同地でイバード派との戦いで死亡した [*EI*<sup>2</sup> 7: 358-360, s. v. "AL-MUHALLABIDS"]。



ブン・ムハンマドの追捕に乗り気ではなかった。しかしその時、件の王国との境界で反乱が発生し、彼は弟のサファンナジャー Safannajā を鎮圧のために送った。サファンナジャーはそこに向かい、たまたまインダス河岸に遠乗りに出ていたアブド・アッラーフ・ブン・ムハンマドの一团と遭遇し、皆殺しにしてしまった。

ヒシャーム・ブン・アムルがこのことをマンスールに伝えると、マンスールはヒシャームに対して、アブド・アッラーフを匿っていた王に対して戦いを仕掛けるように命じた。というのもアブド・アッラーフはその王のもとに滞在している間に、女奴隷との間に息子ムハンマドをもうけていたためである。ヒシャームは、その王の国を征服して王を殺し、ムハンマドとその母をマンスールのもとへ送った。その後、マンスールは彼らをメディナのアリー一家の人々のところに送った。

ここで語られるウマル・ブン・ハフスの解任からヒシャーム・ブン・アムルによる征服に至る出来事は、145/762-763年から151/768-769年までに起こったこととされる。

これに関連する記述として、アブー・アルファラジュ・イスファハーニー Abū al-Faraj al-Isfahānī 『ターリブ家一族の死に様 (Maqātil al-Ṭālibiyīn)』にも、上記のものよりかなり簡略ではあるが、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの息子であるアブド・アッラーフがスインドからヒンドに逃れていき、ヒシャーム・ブン・アムルによって殺された顛末が伝えられている [Maqātil al-Ṭālibiyīn 143-144]。

さらに、これと対応すると考えられる記事として、バラズリー『諸国征服の書』には、マンスールの時代に、ヒシャーム・ブン・アムル・タグリビーがスインド総督に任命され、アムル・ブン・ジャマル 'Amr b. Jamal という人物を将として船団 (bawārij) を派遣し、「ナーリンド」を征服したという記述がある [Futūḥ al-Buldān 444-445]。タバリーによると、ヒシャーム・ブン・アムルがスインド総督から解任されたのは157/773-774年であるので、この逸話はそれ以前の出来事ということになる [Ta'rikh al-Ṭabarī 3: 380]。

ここでアムル・ブン・ジャマルによって征服されたことが語られる「ナーリンド」は、おそらくマフディー期にバスラから海路遠征部隊が派遣された「バールバド」と同じ都市/地域を指すものと考えられる<sup>41)</sup>。

また、バラズリー『諸国征服の書』の伝えるところによると、ヒシャーム・ブン・アムルは、部下を派遣してナーリンドを抑えるのとは別に、北インド方面にも征服の手を伸ばし、カシュミールを征服したという [Futūḥ al-Buldān 445]。そしてさらにその後、「船でカンダハール Qandahār へとやってきて、そこを征服し、寺院を破壊して、モスクを建設した」

41) ナーリンド نرندおよびバールバド بابل は、その子音の弁別点の打ち方を変えるだけでどちらにも読むことが可能であり、書写者が知悉していない地名・人名に関してはしばしば起こる現象である。また、本稿の「むすびにかえて」において示した「ミード=マイトラカ王国」説を取るとすると、この都市はマイトラカ王国の首府であったヴァラビー Valabhi と見なすのが妥当であろう。

と記されている [Futūḥ al-Buldān 445]。

ミノルスキーによると、このカンダハールはカンバーヤ湾の東岸に位置するという [Minorsky 1937: 245; Ahmad 1960: 99]。バラズリーの記述の順序がどの程度実際の年代と対応するかには疑わしい部分もあるが、ヒシャーム・ブン・アムルが自らカティヤワル半島を越えてカンバーヤ湾まで到来し、その地を征服したということになる<sup>42)</sup>。

ヒシャーム・ブン・アムルがアムル・ブン・ジャマルを派遣して行った遠征と、マフディーがバスラからアブド・アルマリク・ブン・シハーブ・ミスマアイーを派遣して行った遠征は、ともに同じ場所（バルバド/ナーリンド）を目指していたと考えられる。史料から再構成される年代がある程度の確かさを持つと考えるならば、このインド領域、特に船で向かうことのできるインド西岸部に対する遠征は、ヒジュラ暦 151 年以前のある時点と、ヒジュラ暦 159 年から 160 年にかけての二度行われたということになるだろう<sup>43)</sup>。

そうであれば、ヒジュラ暦 140 年代後半から 160 年までに至る、バスラとインド西岸部の勢力の間に起こった出来事は以下のように整理することができよう。

- ① アッバース朝の中央部において 145 年にムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ（純粹の魂）の反乱が起こり、彼の息子アブド・アッラーフは反乱の失敗に際してスインド地方の王国へと逃れた。
- ② 既に 141 年にキーシュ島を攻略していたミードは、149 年に至ってハーラク島を経由してバスラ近郊まで至り、そこを攻撃した。
- ③ ミードによるバスラへの攻撃は 151 年にも行われ、同時にジッダへの攻撃も行われていたが、その頃ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの息子アブド・アッラーフは既に殺されており、さらにその息子ムハンマドの身柄を抑えるためにスインド総督ヒシャーム・ブン・アムルが当該の王国へと攻撃をかけ、征服していた。
- ④ しかし 153 年にはさらにもう一度ミードによるバスラへの攻撃が行われており、また、巡礼帰りのマンスールはバスラにおいてスインド遠征軍派遣を企図し、その遠征軍を準備していた（が、このマンスールのスインド遠征軍派遣は沙汰やみになったようである）。
- ⑤ その後、マフディーがカリフ位に就くと、すぐにインド西岸部への遠征軍が派遣され、実際にその地に辿り着いて征服を果たしたが、病の蔓延のために撤退した。その後しばらくの間、ペルシャ湾/アラビア海をめぐるバスラとインド西岸部勢力の間での戦い

42) このカンダハールを現アフガニスタンのカンダハールに比定するのは、スインド方面から船で向かったという記述から考えると現実的ではないだろう。

43) ただしバラズリーが伝えるこの時期のスインドにおける出来事の順序は、ハリファ・ブン・ハイヤートやタバリーが伝える総督就任の順序とは異なる。『諸国征服の書』には、これ以外にも出来事の順序や年代等に錯誤が生じていると思われる点も存在する。そのため、他の史料とあわせた時に、実際には一回であったバルバド/ナーリンドへの遠征が、二回に見える可能性については留意しなければならないだろう。

や交渉の記録は残っていない。

残念ながら、タバリーの記すインド方面に逃れたアブド・アッラーフ、ムハンマド父子の逸話に登場する「王国」と「ミード」をイコールで結ぶ直接的の史料の根拠はない。

しかしその逸話で述べられているヒシャーム・ブン・アムルの遠征が、『諸国征服の書』で述べられているヒシャーム・ブン・アムルの遠征と同一のものであると考えることができるのであれば、その標的はマフディーが行った遠征と同一のものであったと考えることができる。

上述のように、マフディーの遠征はマンスールが行おうと企図していたものを実現したものの、すなわちミードと呼ばれる勢力に対するものであったものだと考えられ、そう考えるならば、アブド・アッラーフ、ムハンマド父子を匿った勢力も「ミード」であると推論することが可能である。

もちろんこの推論は多くの不確定要素が入り込んだものであり、また史料自体の性格からも確定的な結論を出すことができるような強度を持つものではない。とはいえ、この八世紀中葉の十五年ほどの間に、ペルシャ湾/アラビア海の両端ともいえるバスラとインド西岸部を舞台に、アッバース朝の動向に大きく関わる出来事が起きていたことは間違いなく、また、インド西岸部勢力も、単純にアッバース朝に征服される/撃退するだけの受身のプレーヤーではなく、一定規模の船団をアッバース朝の中心であるイラク地域まで派遣して攻撃を行うような主体的なプレーヤーとして立ち現れていることは明らかであろう。その際、アッバース家とアリー家という「ムハンマドの子孫たち」の間での争いが、インド西岸部勢力の動向にどの程度の影響を与えたか、実際のところは必ずしも明らかではないが、少なくとも彼らがそれに乗ずる形でイスラーム領域への攻撃を行ったと考えられるのである。

## むすびにかえて

本稿ではハリーファ・ブン・ハイヤートの『年代記』の中に残された数行の記述を起点に、海からバスラ領域に攻め寄せたミードと呼ばれる人々について検討し、バスラとインド西岸部を両端としてペルシャ湾/アラビア海をわたる政治情勢との関わりについて考察しながら、その様相について明らかにした。

まず、ミードは、ヒジュラ暦一世紀から三世紀/七世紀から九世紀にかけては、概ねインダス川周辺およびカティヤワール半島周辺に勢力を持つ人々であり、その地に侵入するイスラーム勢力と幾度も戦ったほか、さらに海路によりペルシャ湾岸の内側までに攻撃を行うことができるような船団を持っていたこと、が確認された。

さらに、ミードと呼ばれる人々が、アッバース朝期において、おそらくは第二代マンスールの時代に起こったムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの反乱を契機として、アッバース朝に対して積極的な軍事行動をとったと考えられること、そしてそれに対するアッバース

朝側から対応がバスラおよびスインドを中心として行われたこと、を論じた。

上記の八世紀中葉におけるペルシャ湾/アラビア海をめぐる政治動向に加えて、アッパース朝期の歴史を考える上でいくつかの示唆を、本稿で論じたことから提示できるように思われる。

第一に、アッパース朝初期においてすでに、後に現れるような、現地の人々と征服したムスリムの子孫との協力によって形成される地方政権の萌芽が見られることである。後ウマイヤ朝、イドリース朝など、多くの場合、その正統性はムハンマドの子孫を長とすることで担保されるが、本稿で取り上げたムハンマド・ブン・アブド・アッラーフの息子アブド・アッラーフに関する逸話もそれに類する構図を有していたと言えよう。

第二に、アッパース朝期に入り、いわゆるアラブ・ムスリムによる征服活動がそれ以上の発展を見せなくなると、政権の中枢からは離れたいわゆる「地方」に関する情報も格段に減少していくということである。アッパース朝初期から中期までの政治的中心はイラクからホラーサーンにかけての地域であり、それ以外の領域に関する情報量は乏しくなってしまう。もちろん、一つの都市や一つの地域を主題とする「地方誌」的史料は徐々に現れてゆくことになるが、アッパース朝初期から中期までの出来事について十分にフォローできているとは言いがたい<sup>44)</sup>。そのような史料状況の中で、本稿において中心的史料として用いたハリーフア・ブン・ハイヤートの『年代記』が、他には伝えられていないバスラに関する情報を伝えていたように、既知の各史料の史料的特性を十分把握した上で、その数行の記述が持つ意味を深く検討してゆくことが、この時代の理解のために必要になるのではないと思われる。

さて、最後に、本稿で取り上げてきた「ミード」が結局のところ何者であったのか、という点について一つの仮説を提示しておきたい。

まず確認しておかなければならないことは、初期イスラーム時代の史料状況においては、このミードをインドにおけるどの集団に比定すべきであるのかについて確定的な結論を下すことはおそらく今後もできないであろうということである。少なくとも、19世紀の研究者たちがミードを一つの「民族」として捉えた頃とは、「民族」そのものの定義が変化してしまっているため、ミードを海賊/盗賊を生業とする民族であると見なすことはできないように思われる。もちろんミードを「海賊民族」として扱うことは今なお不可能ではないだろう。しかし、13世紀から16世紀まで東アジア海域で猛威を振るった「倭寇」についての理解がこの数十年でかなりの変化を遂げたように、ミードについても、単純に「海賊」として理解するだけでは足りず、それがインド西岸部において担っていたであろう政治的な力についても考えあわせてゆく必要があるだろう。

このような前提を踏まえた上で、筆者は、ミードという言葉がどこに由来するのか、という点について、インド西岸部、カティヤワール半島を中心に西暦8世紀まで存続していたと考

44) いわゆる地方誌的史料とその発生、展開に関しては、森山2009に詳しい。

えられるマイトラカ王国を挙げたい [Verma 1992; Shastri 2000]。

マイトラカ王国は西暦五世紀よりカティヤワル半島東部のヴァラビー Valabhi を首府として栄え、西暦八世紀にアラブの侵入、特に 776 年のマフディーによる遠征が原因となって滅びたとされる [Verma 1992: 61-62; Shastri 2000: 87-90]。先行研究において、その王国の領域は主にカティヤワル半島を中心に北はカッチまでの範囲に及んでいたことが示されているが、ダイブルなど、スインド領域に及んでいたとする証拠はない [Verma 1992: 37-49; Shastri 2000: 95-112]。しかしそれは、この王国に関する史料が土地授与を記録した銅板文書に多くを依存し、彼らの政治的軍事的状況を伝える歴史叙述がまったく利用できないことと無関係ではなかろう。また、この史料的制約から、この王国が海においてどの程度の勢力を持っていたかも知られていない。とはいえ、インド洋交易における重要な中継地点という地勢を考慮するならば、この王国が海事に関してなんらかの力を持っていたと考えるのが妥当ではなかろうか。むしろ「ミード」のペルシャ湾/インド洋における活動は、この王国のそうした側面を明らかにするものではないかと思われる。

この仮説の最も大きな根拠は、ミードとの戦いと連動してアッバース朝が遠征を行ったその目的地が、マイトラカ王国の根拠地であったということである。そしてもちろん、これまで多くのアラビア語史料にある読みに従ってミードと読んできたこの人々の名称を、「マイド (Mayd)」と読むならば、マイトラカ王国と音が類似するということもある。ただし、その音の類似は必ずしもそれだけで十分な根拠となるほどではなく、傍証の一つにすぎない。

史料上の制約のため、アラビア語史料で「ミード」と呼ばれる人々が行ったとされる行動が、マイトラカ王国の政治的中枢からの命令によって整然と行われたと結論することは難しい。彼らが単に「マイトラカの地」からやってきた人々であるというだけでそう呼ばれた集団であるという可能性も、依然として残っている。その点については、マイトラカ王国そのものについての研究がより精密に行われてゆくことが必要になるが、現時点でそれは筆者の限界の範囲外にある。

以上のような理由で、「ミードと呼ばれる集団が、マイトラカ王国に由来するものである」という主張は、十分な確信をもってこれを決定的な結論として提示するには至っていないが、少なくともこれまでほとんど実態が明らかにされていなかったこの人々の由来について、有力な仮説を提示できたのではないかと考える。

アッバース朝カリフ権力が及ばなくなった後に、この地域/海域を巡るイスラーム勢力と在地勢力の関係がどのように変化したかについては、それを吟味するための材料が乏しいため、ただちに明らかにすることは難しい。貨幣資料やイスマール派との関係などをステップに検討してゆくことが、今後の課題となろう。

## 参考文献

- Ansāb al-Ashraf III : Abū al-'Abbās Aḥmad b. Yaḥyā b. Jābir al-Balādhurī, *Ansāb al-Ashraf*, vol. 3, ed. 'Abd al-'Azīz al-Dūrī, Bayrūt & Wiesbaden, 1978.
- al-Faraj ba'da al-Shidda : Abū 'Alī al-Ḥasan b. 'Alī al-Tanūkhī, *Kitāb al-Faraj ba'da al-Shidda*, ed. 'Abbūr al-Shālījī, Bayrūt, 1978.
- al-Fasawī : Abū Yūsuf Ya'qūb b. Sufyān al-Fasawī, *Kitāb al-Ma'rifa wa al-Ta'rikh*, ed. Akram Diyā' al-'Umārī, 3 vols., Baghdād, 1976.
- Futūḥ al-Buldān : Abū al-'Abbās Aḥmad b. Yaḥyā b. Jābir al-Balādhurī, *Kitāb Futūḥ al-Buldān*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1866.
- Ibn Abī Ḥātim : Abū Muḥammad 'Abd al-Raḥmān b. Abī Ḥātim Muḥammad b. Idrīs b. al-Mundhir al-Tamīmī al-Ḥanzalī al-Rāzī, 8 vols., Ḥaydar Ābād, 1952-1953.
- Ibn 'Asākir : Abū al-Qāsim 'Alī b. al-Ḥasan Ibn 'Asākir al-Shāfi'i, *Ta'rikh Madīnat Dimashq*, 80 vols., Bayrūt, 1995-2001.
- Ibn al-Faqīh : Abū Bakr Aḥmad b. Muḥammad Ibn al-Faqīh al-Hamadhānī, *Mukhtaṣar Kitāb al-Buldān*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1885.
- Ibn Hawkal : Abū al-Qāsim Muḥammad Ibn Ḥawqal al-Naṣībī, *Kitāb Ṣūrat al-Ard*, Bayrūt, n. d.
- Ibn Khurdādhbih : Abū al-Qāsim 'Ubayd Allāh b. 'Abd Allāh Ibn Khurdādhbih, *al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1889.
- Ibn Sa'd : Muḥammad b. Sa'd b. Manī' al-Zuhri, *Kitāb al-Ṭabaqāt al-Kabīr*, ed. 'Alī Muḥammad 'Umar, 11 vols., al-Qāhira, 2001.
- al-Idrīsī : Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Muḥammad al-Ḥasanī al-Idrīsī, *Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fī Ikhtirāq al-Āfāq (Opus Geographicum : Sive "Liber ad Eorum Delectationem qui Terras Peragrarē Studeant")*, ed. E. Cerulli, Neapoli, 1970-1978.
- al-Iṣṭakhri : Abū Ishāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārisī al-Iṣṭakhri al-Karkhī, *Kitāb Masālik al-Mamālik*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1927.
- Jamharat Nasab Quraysh : al-Zubayr b. Bakkār, *Jamharat Nasab Quraysh wa Akhbār-hā*, al-Qāhira, 1962.
- Lisān al-'Arab : Jamāl al-Dīn Muḥammad b. Mukarram Ibn Manzūr al-Anṣārī, *Lisān al-'Arab*, 20 vols, al-Qāhira, n. d. (reprint of Būlāq edition.)
- Maqātil al-Ṭālibiyyin : Abū al-Faraj al-Isfahānī, *Maqātil al-Ṭālibiyyin*, ed. Aḥmad Ṣaqr, al-Qāhira, 2003.
- Mu'jam al-Buldān : Shihāb al-Dīn Abū 'Abd Allāh Yāqūt b. 'Abd Allāh al-Ḥamawī al-Rūmī al-Baghdādī, *Mu'jam al-Buldān*, 5 vols., Bayrūt, 1977.
- Mujmal al-Tawārikh : Anonymous, *Mujmal al-Tawārikh wa al-Qiṣaṣ*, Tihirān, 1939.
- Murūj al-Dhahab : Abū al-Ḥasan 'Alī b. al-Ḥusayn al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādīn al-Jawhar*, 7 vols., ed. Ch. Pellat, Bayrūt, 1965-1979.
- Ṣūrat al-Ard : Abū Ja'far Muḥammad b. Mūsā al-Khwārizmī, *Kitāb Ṣūrat al-Ard*. Wien, ed. H von

- Mżik, Leipzig, 1926.
- Tahdhib al-Lughā : Abū Maṣṣūr Muḥammad b. Aḥmad al-Azhārī, *Tahdhib al-Lughā*, 17 vols, ed. 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn et al. al-Qāhira, 1964-1976.
- Ta'riḫ Khalifa : Khalifa b. Khayyāt al-'Uṣfūrī, *Ta'riḫ Khalifa b. Khayyāt*, ed. Diyā' Akram al-'Umari, al-Madīna, 1985.
- Ta'riḫ al-Ṭabarī : Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm, Cairo, n. d. (ただし頁番号については本文欄外に記されているライデン版のもので表示する)
- Ta'riḫ al-Ya'qūbī : Abū al-'Abbās Aḥmad b. Ishāq Ibn Wāḍiḥ al-Ya'qūbī, *Ta'riḫ al-Ya'qūbī*, 2 vols., ed. M. Th. Houtsma, Leiden, 1883.
- al-Zubaydi : Muḥammad Murṭaḍā al-Ḥusaynī al-Zubaydi, *Tāj al-'Arūs min Jawhar al-Qāmūs*, 40 vols., ed. 'Abd al-Sattār Aḥmad Farrāj et al, al-Kuwayt, 1965-2001.
- Ahmad, S. Maqbul. (1960) *India and the Neighbouring Territories in the Kitāb nuzhat al-mushtāq fi khtirāq al-'āfāq of al-Sharīf al-Idrīsī*. Leiden.
- Al-'Alī, Ṣāliḥ Aḥmad (1986) *Khiṭaṭ al-Baṣra wa Miṭṭaqat-hā : Dirāsa fī Aḥwāl al-'Imrāniya wa al-Māliya fī al-'Uḥūd al-Islāmīya al-'Ūlā*. Baghdād.
- Elad, A. (2004) The Rebellion of Muhammad b. 'Abd Allah b. al-Ḥasan (known as al-Nafs al-Zakīyah) in 145/762. In: *'Abbasid Studies : Occasional Papers of the School of 'Abbasid Studies, Cambridge, 6-10 July 2002*. ed. J. Edward, Leuven.
- Elliot, H. M. (1867) *The History of India as told by its own Historians : The Muhammadan Period*, ed. John Dowson, London. (Frankfurt am Main, 1997 repr.).
- De Goeje, M. J. (1886) A Contribution to the History of the Gypsies. In: *Accounts of the Gypsies of India*, ed. D. MacRitchie. London.
- Hourani, G. F. (1995) *Arab Seafaring : In the Indian Ocean in Ancient and Early Medieval Times*. Princeton. (expanded edition of first edition, 1951)
- Meisami, J. S. (1999) *Persian Historiography to the End of the Twelfth Century*. Edinburgh.
- Minorsky, V. (1937) *Hudūd al-'Ālam 'the Regions of the World' : a Persian Geography, 327 A. H.-982 A. D.*, London.
- Minorsky, V. (1942) *Sharaf al-Zamān Ṭāhir al-Marvazī on China, Turks and India : Arabic Text (circa A. D. 1120) with an English Translation and Commentary*. London.
- Shastri, H. G. (2000) *Gujarat under the Maitrakas of Valabhi : History and Culture of Gujarat during the Maitraka Period — Circa 470-788 A. D.* Vadodara.
- Le Strange, G. (1905) *The Lands of the Eastern Caliphate : Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem Conquest to the Time of Timur*. London.
- Verma, N. (1992) *Society and Economy in Ancient India : An Epigraphic Study of the Maitrakas (C. AD 475-775)*. New Delhi.

- Wink, A. (1990) *Al-Hind: The Making of The Indo-Islamic World*. vol. 1. Leiden & New York.
- 稲葉 稔 (1999) イスラーム教徒のインド侵入 樺山紘一 (編) 『南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』(岩波講座・世界歴史 第六巻) 岩波書店, 157-180.
- 高野太輔 (2008) 『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社.
- 花田宇秋訳 (2001) バラズリー 『諸国征服史』 21 『明治学院論叢 656 (総合科学研究 65)』 29-72.
- 森山央朗 (2009) 『ハディース学文献としての地方史人名録：10-13 世紀の編纂流行とその背景』(博士学位論文, 2009 年, 東京大学大学院人文社会系研究科)
- 家島彦一 (2011) 『インドの驚異譚』 全二巻 ブズルグ・ブン・シャフリヤール著, 家島彦一訳注 (東洋文庫 813, 815) 平凡社.

(日本学術振興会／財団法人東洋文庫)